

- 担い手への農地集積が進むなか、**100haを超える大規模経営体**が出現していますが、規模拡大が米・麦・大豆の生産性向上・高品質生産に結び付かない事例が見受けられます。
- 農家や集落営農組織など、担い手における水田農業の生産性向上や安定化に向けた**課題を整理した「農家カルテ」**を支援対象や関係機関と共有しながら改善策を提案し、着実に課題解決を図りました。
- 農家カルテによる提案を4年間で**延べ758経営体で実践**されました。その結果、①**水稻新品種の作付け拡大**、②**麦作での排水対策の定着**、③**大豆新品種の導入検討**が進みました。

具体的な成果

■水稻新品種の作付け拡大

- ・県育成品種の導入

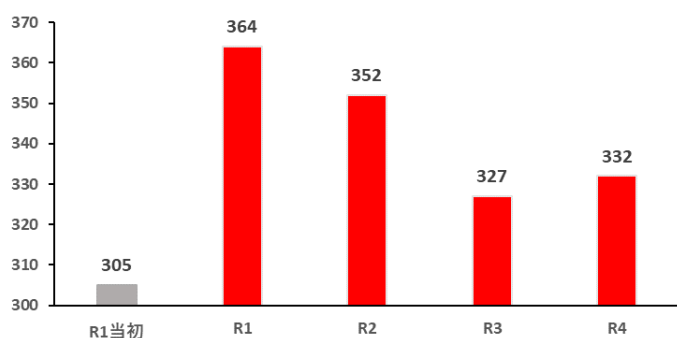
「なついろ」 0ha (H30産) ⇒ 262ha (R4産)

「みのりの郷」 0ha (H30産) ⇒ 160ha (R4産)

■麦作での排水対策の定着

- ・**チゼル深耕体系**をはじめとした排水対策技術等の定着により目標単収 (320kg/10a) を安定して上回りました。

麦平均単収 (kg/10a)



■大豆新品種の導入検討

- ・低収が続く大豆作において、作期分散が可能な大豆新品種を選定しました。

・選定した大豆品種「**サチユタカA1号**」の現地実証を行いました。

6月中旬から播ける大豆
サチユタカA1号
栽培暦



令和4年3月
三重県

普及指導員の活動内容

具体的な事例

- 資材費高騰対策として、地域内の畜産農家で生産された**堆肥の活用**により、麦作における化学肥料の使用量を削減しました。また、水稻作でも堆肥活用の検討が進みました。
- 大規模化に伴う作業遅延対策として、**乾田直播技術**を導入しました。作業時間の短縮により、適期作業が可能になりました。また、代かきを実施しないため、ほ場の排水性が向上し、後作キャベツの定植をスムーズに実施することができました。



グレンドリルによる播種作業の様子

普及活動員だからできたこと

- ・個々の担い手に応じた改善提案
- ・関係機関との協力体制の構築

三重県

「農家カルテ」を活用した水田農業担い手の 経営基盤強化と産地の強化

活動期間：平成 27 年度～活動継続中

1. 取組の背景

担い手への農地集積が進むなか、100ha を超える大規模経営体が出現していますが、規模拡大が米・麦・大豆の生産性向上・高品質生産に結び付かない事例が見受けられました。特に、麦・大豆については、単収が目標数値を下回る状況が続いていました。

このため、支援対象となる経営体を明確にしたうえで、経営体ごとに、主要作目の生産性を向上し高品質生産に結び付けるための課題とその改善提案を「農家カルテ」として整理し、支援対象やＪＡ等の関係機関と共有しながら、着実な課題解決を図ることとしました。

2. 活動内容（詳細）

（１）「農家カルテ」の対象とする経営体の選定

経営規模 10 h a 以上の個別経営体及び集落営農組織の中から、各地域農業普及センターにおいて、「農家カルテ」による効果的な支援が可能と思われる経営体を選定しました。

（２）水稻の新品種導入と低コスト化技術導入の提案

大規模化による作期分散や高品質生産に向けて、三重県育成の水稻新品種「なついろ」や「みのりの郷」の導入提案や、コスト低減および作業遅延対策として乾田直播栽培の導入を提案しました。

（３）麦、大豆の生産性向上対策

麦、大豆、飼料用米等の生産性向上を中心に、露地野菜等も含めて主食用米とのトータルでの作付け組み合わせ（ベストミックス）を経営体ごとに提案するなど、経営モデルの構築を行う活動を実施しました。

特に、麦については排水対策や土づくりの徹底を、大豆については新品種の導入を中心に提案しました。

* 普及事業の関連予算の活用

「新品種・新技術の確立支援事業」（令和 2 年度～3 年度）

県産大豆の主力品種である「フクユタカ」は早播き（6 月中）では、倒伏や青立ちが懸念されるため、7 月以降の播種が中心となっています。しかし、この時期は梅雨時期であり、降雨による播種遅延や湿害が深刻な問題となっています。

そこで、新品種・新技術の確立支援事業の活用により、「フクユタカ」よりも早期に播種を行うことで、作期分散やリスク分散が可能な新品種を実証栽培し、導入の可否について検討しました。

3. 具体的な成果（詳細）

農家カルテにより、令和元年度から4年度までの4年間で延べ 758 経営体において課題解決に向けた提案し、実践されました。その結果（1）水稻新品種の作付け拡大、（2）麦作での排水対策の定着、（3）大豆の新品種の導入等の成果が得られました。

（1）水稻新品種の作付け拡大

三重県育成の水稻新品種で、高温登熟性や収量性が高く、実需者との結びつきが強い「なついろ」「みのりの郷」「三重23号（結びの神）」等の作付けが拡大しました。

「なついろ」 0 h a （H30 年産） → 262 h a （R 4 年産）

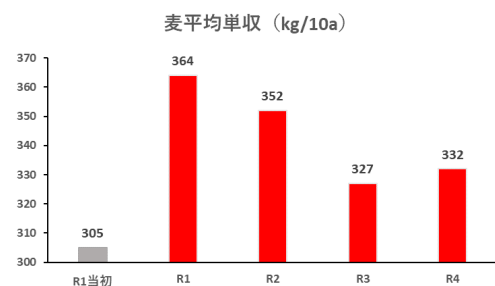
「みのりの郷」 0 h a （H30 年産） → 160 h a （R 4 年産）

2）麦作での排水対策の定着と単収向上

チゼル深耕体系を始めとした排水対策技術が定着した他、堆肥や土壌改良資材による土づくり、難防除雑草対策により目標単収（320 k g / 10 a）を安定して上回る成果につながりました。



水稻新品種の傾穂期の様子



麦平均単収の結果（R 元～4 年度）

（3）大豆新品種の導入

低収が続く大豆作において、作期分散が可能な大豆新品種「サチユタカ A 1 号」を選定し、各地域で試験導入が開始されました。

「サチユタカ A 1 号」は、R 4 年産においては、49 経営体で 59 h a が作付けされました。



「サチユタカ A 1 号」の生育状況



「サチユタカ A 1 号」栽培暦

4. 農家等からの評価・コメント

農家の課題解決のためのツールとして農家カルテが有効活用されていることは評価できる。水田農業では、水田での高収益作物の導入や耕畜連携による飼料自給率の向上など、他の農業部門との連携も重要となるため、これらを意識した活動を期待する。（外部評価委員）

5. 普及指導員のコメント

これまで主な課題となっていた規模拡大や生産性向上のほかにも、需要に応じた作物生産や環境保全の取組など新たな課題も出ています。このように課題が多様化するなか、個々の農家に応じた普及活動は益々重要になると考えています。引き続き、課題やその解決策を農家カルテとして整理し、農家と共有するとともに、関係機関一体となって課題の解決に取り組んでいきます。（三重県中央農業改良普及センター・農業革新支援専門員 内山 裕介）

6. 現状・今後の展開等

個々の農家の現状を分析し、作成する農家カルテは農家毎の課題解決に有効であったことから、今後も農家カルテを通じた課題解決に向けた提案・実践の活動を継続します。